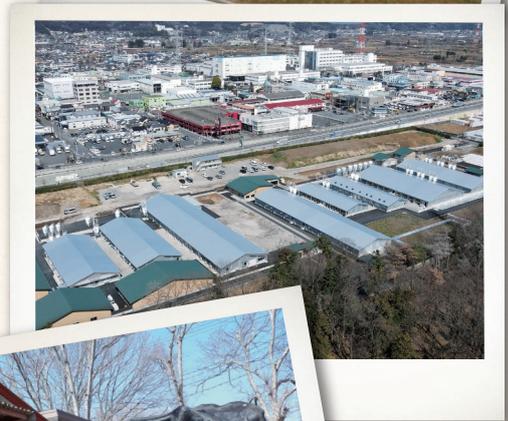


# 青梅庁舎新施設のご案内



令和3年4月

公益財団法人 東京都農林水産振興財団

## [ 目 次 ]

- 1 ) 理事長挨拶…………… P.2
- 2 ) 沿革…………… P.3
- 3 ) 施設の変遷…………… P.4
- 4 ) 主な試験研究のあゆみ…………… P.5～6
- 5 ) 再編整備について～旧畜産試験場100周年～…………… P.7
- 6 ) 新施設のご紹介…………… P.8～11
- 7 ) 青梅庁舎事業案内…………… P.12～13

### ごあいさつ

当財団は、東京の農林水産業の振興のために数々の事業を展開しています。中でも青梅庁舎はトウキョウXや東京しゃも、東京うこっけいといったブランド畜産物の種豚やひなの供給、生産者への技術指導、畜産技術に関する試験研究を通じ、畜産業の発展に貢献してまいりました。

また、2020年は旧畜産試験場開設から100周年に当たります。100年という長きにわたり、東京の畜産の振興に果たしてきた役割は大きいものと感じています。

しかし、青梅庁舎の施設は1980年代に建築されたもので老朽化が著しく施設の損壊や機器の故障が多発し、特に衛生管理についてのリスクが増してきていることが否めませんでした。そこで、東京都と当財団は、2019年度から豚舎、鶏舎の再編整備を開始し、2020年度に竣工いたしました。

新豚舎・鶏舎は、高度な衛生管理を実現し、最新式の飼養管理設備も導入して種畜・種鶏等の確実な維持及び増産が可能となるものです。

100年の歴史を踏まえるとともに、これからの畜産振興に必要な課題を見極め、新施設を活用して積極的に事業を展開してまいります。

引き続き、関係者、都民の皆様のご理解とご協力をお願いします。

2021年4月

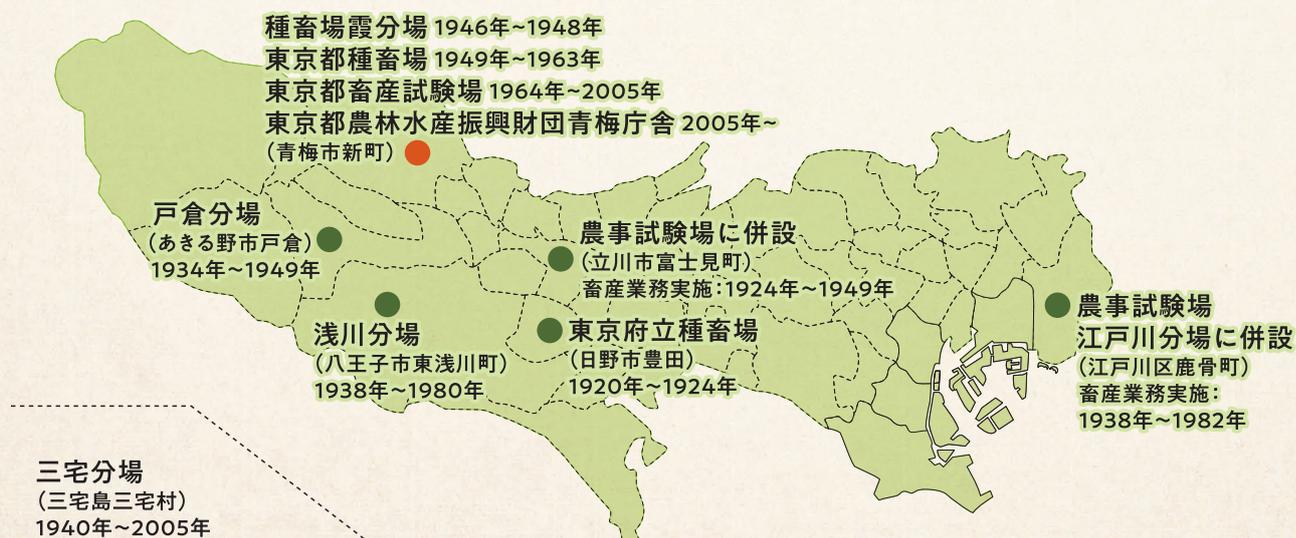
(公財)東京都農林水産振興財団 理事長 岩瀬 和春



## [ 沿革 ]

1920年(大正9年)	東京府立種畜場設立(日野市)
1924年(大正13年)	種畜場移転(農事試験場併設)(立川市)
1934年(昭和9年)	戸倉分場設置(あきる野市戸倉)
1938年(昭和13年)	江戸川分場で畜産業務開始(江戸川区鹿骨町)
	浅川分場設置(八王子市東浅川町)
1940年(昭和15年)	三宅分場設置(三宅島三宅村)
1946年(昭和21年)	霞分場設置(青梅市)
1949年(昭和24年)	霞分場を本場とする(青梅市新町)
	戸倉分場を林務課へ移管
1964年(昭和39年)	東京都畜産試験場に改称、試験研究業務開始
1980年(昭和55年)	豚舎鶏舎完成、浅川分場を廃止し本場へ統合
1981年(昭和56年)	本館新築
1982年(昭和57年)	総合牛舎新築
1994年(平成6年)	東京都有機農業堆肥センター設置
2005年(平成17年)	財団法人東京都農林水産振興財団に統合
	研究部門は農林総合研究センター、事業部門は 青梅畜産センターに改組。三宅分場は(財)東京都 島しょ農林水産総合センターへ移管
2010年(平成22年)	財団法人から公益財団法人へ移行
2019年(令和元年)	鶏舎、豚舎再編整備工事開始
2021年(令和3年)	新鶏舎、新豚舎竣工

※2021年(令和3年)以降 牛エリア・本館建物等改修予定



## [ 施設の変遷 ]



東京府立種畜場(昭和30年頃撮影)



浅川分場事務所(昭和29年頃撮影)



江戸川分場(昭和28年頃撮影)



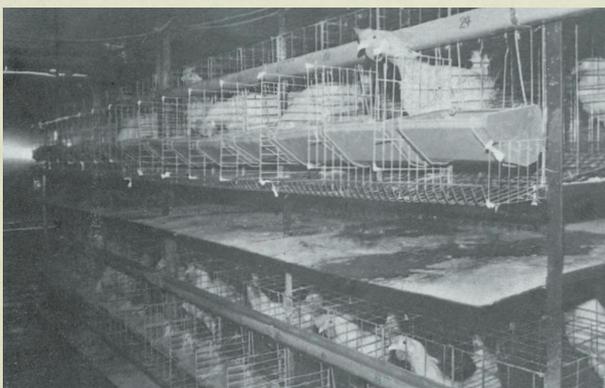
霞分場本館(昭和51年頃撮影)



建設当時の牛飼育エリア(昭和56年頃)



建設当時の豚舎(昭和56年頃)



建設当時の鶏舎(昭和56年頃)



青梅庁舎本館(平成28年頃)

## [ 主な試験研究のあゆみ ]

年度	
1921年(大正10年)	カナダ・アメリカよりホルスタイン種の導入を開始 乳用牛雄雌計11頭を導入 貸付、配付により農家の泌乳能力向上に貢献
1925年(大正14年)	毛皮用や肉用に兎の飼養と配付を開始 実験用兎の研究は昭和60年まで継続
1935年(昭和10年)	軍需羊毛自給および小家畜の普及のため緬山羊の改良増殖、配付を開始
1938年(昭和13年)	水禽増殖事業を江戸川分場で開始 肉利用と共に水田の除草にも利用され、飼養技術研究は昭和61年まで継続
1938年(昭和13年)	家禽改良増殖を浅川分場で開始
1948年(昭和23年)	都内の種鶏改良を目的に鶏産卵能力検定事業を開始
1948年(昭和23年)	家畜改良増殖法施行(昭和25年)に伴い、乳牛人工授精試験を開始
1960年(昭和35年)	豚産肉能力検定開始 全国統一飼料による産肉能力検定を開始
1967年(昭和42年)	家畜ふん尿処理関係試験開始 都市化の中で畜産が共存していくための新たな課題への対応
1968年(昭和43年)	牛精液の凍結保存技術試験を開始 昭和49年には乳牛人工授精を凍結精液へ全面切り替え
1968年(昭和43年)	関東東山6都県による乳牛協定飼養試験を開始 共通の課題へ各都県が連携した取り組み
1982年(昭和57年)	東京しゃもの交配様式が決定 闘争性を除去した軍鶏の戻し交雑により、肉質とうまみに特徴を持つ高品質肉用鶏(昭和61年知事表彰)
1986年(昭和61年)	系統豚エド(ランドレース種)の認定 都内養豚農家の要望に応えた成長が早く、赤肉量の多い系統(昭和61年知事表彰)



カナダから導入したホルスタイン種メス牛



江戸川分場のアヒル



闘争性の除去から始まった東京しゃもの開発



成長が早く産肉性に優れた系統豚エド(ランドレース種)

## [ 主な試験研究のあゆみ ]

年度	
1992年(平成4年)	羽毛鑑別鶏の作出 伴性遺伝を利用し毛色の違いで雌雄の鑑別が可能な系統を作出。雌雄鑑別師のいない島しょ農家の支援に貢献 (平成6年知事表彰)
1997年(平成9年)	系統造成豚トウキョウXの完成 時代のニーズを見据え、量より肉質を重視して開発した新たな系統。3品種の合成豚として国内初の系統認定 (平成10年知事表彰)
1998年(平成10年)	東京うこっけいの系統を確立 産卵率が高く、飼料効率、収益性に優れた都市養鶏に適した系統
2000年(平成12年)	高泌乳牛(スーパーカウ)の体細胞クローン牛を作出 優れた遺伝資源を受精卵移植技術によって有効利用する技術の開発
2014年(平成26年)	トウキョウXの判別のためのDNAマーカーおよびその利用 精肉からXの判別が可能な簡易で精度の高い判別技術の開発 TOKYO X肉の偽物販売抑止に高い効果(特許取得)
2017年(平成29年)	烏骨鶏の肉質改善方法の開発 採卵を終えた雌鶏や未利用の雄鶏を用いた東京うこっけい肉の有効活用法(特許取得)
2017年(平成29年)	体外受精卵移植によるトウキョウXの子豚誕生 と畜場由来の卵子を利用し、肉豚増産に向けた技術開発



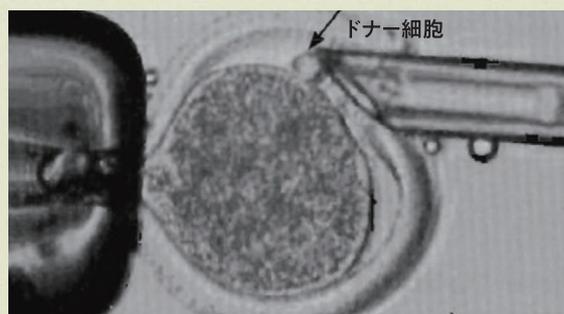
羽毛色で雌雄の鑑別が可能な羽毛鑑別鶏



7年の歳月をかけ開発したトウキョウX



高産卵で高収益が期待できる東京うこっけい



体細胞クローン胚作出のための顕微操作



体外受精卵移植で産まれた子豚たち

## [ 再編整備について ] ～旧畜産試験場 100 周年～

財団青梅庁舎の前身である東京都畜産試験場は、1920年(大正9年)に日野市に設立された東京府立種畜場を起源としており、何回かの移転、再編を経て現在の青梅市に設置されました。この東京府立種畜場の開設から数え、2020年(令和2年)で100周年となります。この間、都内畜産農家の経営を支えるための試験研究、指導等を行ってきました。

当財団となってからも「東京ブランド畜産物の種畜の生産・供給」「畜産技術に関する試験・研究」「食育の推進」を継続的に実施してきました。

しかし現施設は、大半が1980年代に建築したもので老朽化が甚だしく、設備も旧式なため作業効率も悪い状態にあります。また家畜伝染病等に対する防疫施設も旧式化しており、昨今の国内の感染リスクを鑑み一層の防疫体制の強化が必要となっております。

そこで東京都では、2015年(平成27年)5月に再編整備基本構想を策定し、2019年(令和元年)から東京都と東京都農林水産振興財団は再編整備工事を開始しました。そしてこのたび、東京府立種畜場設立から100周年の節目となる年に竣工したところです。

新施設は現在当財団青梅畜産センターに求められる役割を見据え以下の特徴を有しています。

- ① 高度な衛生管理レベルを確保し、家畜伝染病の発生を防止
- ② 環境に配慮するとともに作業効率の向上と種畜等の増産を実現
- ③ アニマルウェルフェアにも配慮しながら繁殖性や産卵率の向上

当財団は、豊かな都民生活の実現に向け、100年の歴史と経験を踏まえ、新豚舎、鶏舎を活用し今後とも東京の農林水産業の振興を図っていきます。

### 敷地北側の圃場跡地に、鶏舎と豚舎を新設しました

青梅庁舎  
配置図



旧鶏舎・旧豚舎の跡地は飼料畑や広場として活用予定

## [ 新施設のご紹介 ]

### 新施設整備のポイント

- POINT 1 高度な衛生レベルの確保による家畜伝染病発生の防止
- POINT 2 環境に配慮した最新システムで作業効率の向上、種畜の増産の実現
- POINT 3 アニマルウェルフェアへの配慮と繁殖性や産卵率の向上



#### ① 高度な衛生レベルの確保による家畜伝染病発生の防止

- ・伝染病発生の要因となる野生動物等の侵入防止を考慮したフェンスの設置
- ・職員等のシャワーイン、専用衣服の導入による病原体持ち込みの防止
- ・職員や物品の動線を分離して、交差汚染を防ぎ衛生レベルを確保



衛生管理区域の周りは野生動物の進入を防止するフェンスで囲われています



職員や入場者は、エリアに入る際シャワーを浴び、エリア内専用衣服に着替えます



外部から持ち込む物品はパスボックスで紫外線殺菌します

## ②環境に配慮した最新システムで作業効率の向上、種畜の増産の実現

- ・完全に屋内で飼養するウインドレス畜舎で飼養環境の改善と悪臭発生等の防止
- ・豚舎には空気圧による飼料搬送を行う自動給餌装置を導入
- ・除糞・洗卵・検卵選別の自動化
- ・高圧洗浄用配管を敷設し、洗浄機本体を動かさなくても掃除が可能



畜舎は完全密閉式のウインドレスで伝染病の予防や飼養環境の改善、悪臭防止を実現しています



自動給餌装置の導入により、複数の飼料や添加剤を正確な比率で混合、自動給餌が可能となりました



手作業で行っていた除糞・集卵・洗卵・検卵作業を全て自動化し作業の効率化を実現しました

## ③アニマルウェルフェアへの配慮と繁殖性や産卵率の向上

- ・クーリングパッドや床暖房などを利用した温度調節付きの畜舎
- ・豚舎は、妊娠豚の適切な管理が可能となる母豚群管理システムの導入
- ・鶏舎は、鶏の健康を考慮し、自由に動けるサイズのケージを導入



畜舎壁面には、夏場の暑熱対策として流水で空気を冷やすクーリングパッドが設置されています



母豚群管理システムでは、母豚の自由な行動を妨げることなく個体管理を行うことができます



大型ケージを採用し、ケージ内には止まり木も設置しています

## [ 鶏エリアのご紹介 ]

鶏エリアは、ひな配付窓口、職員詰所、孵卵舎、育雛育成舎、種鶏舎があり、施設面積は約3,238㎡です。新技術を活用した種卵(ふ化用卵)の自動検卵機や自動洗卵機、自動集卵施設等を備えています。

### 洗卵・検卵作業の自動化



自動洗卵機を導入し、洗卵作業の自動化・効率化を実現しました

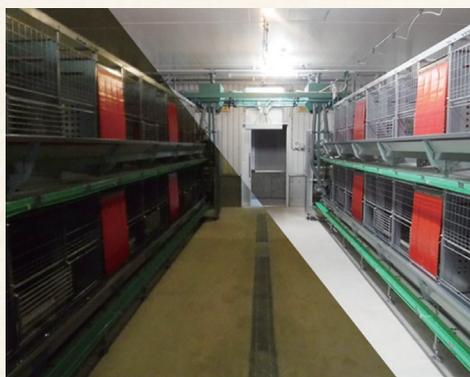


無精卵や発生中止卵は、光学式心拍センサーを備えた自動検卵機で選別・除去されます



これまでは、洗卵・検卵作業は職員が手作業で行っていました

### 光線管理・衛生管理



全ての鶏舎はウィンドレス構造であり、照明時間や光度が正確にコントロールされます



鶏舎には除糞ベルトが設置され、堆積乾燥後の糞は、自動で搬出されます

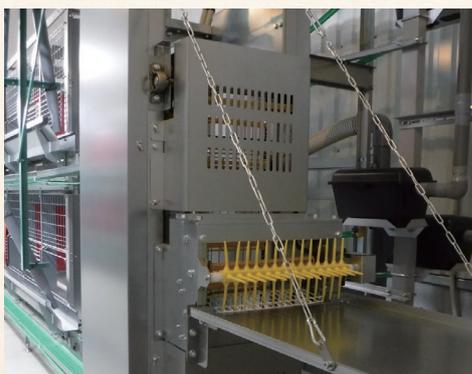


従来の開放型鶏舎は、光線管理が確実でなく、スクレーパ式の除糞では糞の取り残しもありました

### 集卵作業の自動化



各ケージで産卵された卵は集卵ベルトにより自動的に搬送されます



搬送された卵はエレベーター式の運搬装置により、一か所に集められます



これまで、集卵作業は職員が手作業で行っていました

## [ 豚エリアのご紹介 ]

豚エリアは、職員詰所、種畜舎、分娩舎、離乳舎、育成舎、内出荷台、外出荷台があり、施設面積は約4,581㎡です。ICタグを利用した母豚群管理システムや空気圧による飼料搬送の自動給餌装置を備えています。

### 母豚群管理システムを導入



母豚群管理システムの給餌ステーションでは、母豚に装着したICタグが読み取られ、個体毎に正確な給餌を行い、母豚の体型管理を省力化することができます



母豚が発情検知ユニットに近づく回数と時間をICタグからカウントすることで発情レベルを計算して、再発情が来た母豚を仕分けることができます



母豚はコロニー豚舎で飼育され、給餌量の調整や発情確認を一頭毎に実施していました

### 空気圧を利用した自動給餌装置を導入



給餌箱毎に給餌量の調整が可能となるのに加え、餌箱に飼料が残っているかどうかを、センサーで検知することができます

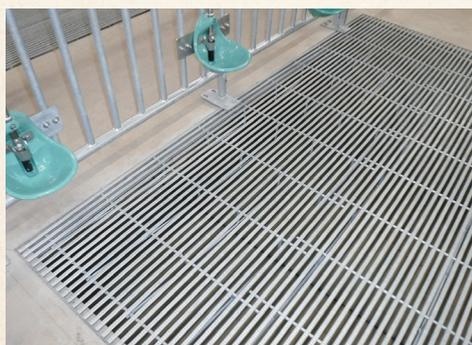


複数の飼料や添加剤を正確な比率で混合することができ、飼料試験などにも活用が期待できます



これまで、飼料への添加剤や抗生物質の添加を手作業で実施していました

### 除糞作業の自動化



豚舎の床はすのこになっており、排泄物は地下ピットに落ち、固液分離されます



尿は浄化槽で処理され、糞はバンクリーナーで豚ふん集積所まで運ばれた後、堆肥化されます



これまで、コンクリート敷きの豚舎では、職員が手作業で糞の掃除を実施していました

# [ 青梅庁舎事業案内 ]

## 青梅畜産センター

### 東京ブランド畜産物の 種畜維持を担う

- ・種畜の系統維持および血統管理
- ・畜産農家等への種畜の配付及び技術指導
- ・畜産物の生産拡大及び消費拡大のための支援
- ・家畜への理解を深めるための活動

#### 【トウキョウX】

1997年(平成9年)に系統造成豚として認定されたトウキョウXの系統維持と血統管理を行っています。維持群(原々種豚)から生産した子豚を「TOKYO X生産組合」を通じて、加盟する生産者に原種豚として配付します。生産農家はこれをもとに種豚と肉豚を生産し、出荷します。



#### 【東京しゃも】

改良した純系軍鶏と二元交雑時に用いるロードアイランドレッド種の系統を維持し、1984年(昭和59年)に完成させた交配様式をもとに東京しゃものヒナを生産して養鶏農家に配付しています。また、高病原性鳥インフルエンザ対策の一環として、都立大島高校の協力を得て、系統保存のための分散飼育を行っています。



#### 【東京うこっけい】

産卵率の向上を目的に選抜を行い、より多くの卵を生むよう改良した東京うこっけいの系統を1998年(平成10年)に確立しました。当センターでは、この系統を維持しながらヒナを生産して養鶏農家に配布しています。都立大島高校で分散飼育を行っています。



## 農林総合研究センター畜産技術科

### 試験研究による技術開発で 東京の畜産の基礎を支える

- ・畜産の生産性向上技術の開発
- ・高収益型経営を支えるブランド畜産物の品質確保、高付加価値化
- ・畜産環境問題を低コストかつ効率的に解決する技術開発

#### 【生産性向上技術の開発】

限られた生産基盤を有効に活用し、最大限の生産性を確保するため、酪農では繁殖障害や環境ストレス等の生産阻害要因の対策技術を確立します。また、治療等で使用される各種薬剤の使用低減技術や家畜疾病予防技術の開発等にも取り組んでいます。養豚では、受精卵移植技術を活用したトウキョウXの遺伝資源保存に取り組めます。

#### 【ブランド畜産物の品質確保、高付加価値化】

青梅畜産センターと連携して東京ブランド畜産物の遺伝資源を管理し、種畜・種鶏の安定的な供給支援に努めています。東京ブランド畜産物の高い品質を確保するための技術の確立並びに畜産物の有用性に明確なエビデンスを検証することで、魅力ある生産物の高付加価値化を進めています。

#### 【畜産環境問題を解決する技術開発】

住宅地に接しながら生産を続ける都内畜産農家にとって、臭気と並んで近隣への影響が大きい衛生害虫について、総合的害虫管理システムを構築するための試験研究を行っています。



## 有機農業堆肥センター

有機農業堆肥センターは、1994年（平成6年）に東京都が有機農業をはじめ環境と調和した環境保全型農業を推進するため、「土作り」に不可欠な優良堆肥生産を実証するモデルプラントとして設置されました。青梅庁舎内や近隣畜産農家から毎日搬入される家畜ふん（飼料残渣や敷料を含む）に、リサイクルセンターで生産された街路樹等の剪定枝チップを副資材として混合し、約2~3か月かけて完熟堆肥化を図っています。



### 【優良堆肥の生産販売】

東京都エコ農産物認証制度の認証を受けた生産者、環境保全型農業に取り組んでいる生産者等に対して、優良堆肥を販売しています。



### 【堆肥生産技術の普及】

優良堆肥生産技術を都内畜産農家等に普及するため、施設を公開し、技術や情報を提供しています。



### 【都民へのPR】

循環型社会の構築、環境保全型農業の推進等、東京都が取り組む施策をPRしています。

1 家畜糞と剪定枝チップを混合し、2 自走式攪拌機で定期的に攪拌し、約20日間一次発酵する。さらに、3 横型ロータリー式発酵槽で毎日攪拌し、約20日間二次発酵する。4 ふりい装置にかけて夾雑物を除去し、約20~30日間、後熟処理をする。完成堆した堆肥は5 パラ積みまたは6 袋詰めて販売する。

## 【畜産への理解を深めるための活動】

青梅庁舎では年に2回「家畜ふれあいデー」を開催し、地域の方々に牛の搾乳体験や畜産に関するクイズなどを実施しています。家畜たちとのふれあいによって動物の息遣いや肌のぬくもりを感じ、子供達に命の大切さや自然に対する感受性を育ててもらうことを目的としています。また、青梅庁舎では、青梅市自治会連合会と青梅食育クラブと連携して、体験農園を設置しています。食を通じて地域の特性等を理

解することや、食文化の継承を図ること、自然の恵みや勤労の大切さなどを理解することを目的としています。夏休みや家畜ふれあいデーで開催される料理教室では、農園で採取した野菜を使っています。その他、東京都食育フェアや東京味わいフェスタ等のイベントに参加し、畜産に関するクイズの実施や東京の畜産物のPRを行っています。

※家畜伝染病対策等、防疫上の理由により、イベントの開催を中止することがあります。



搾乳体験



畜産クイズの実施



東京の畜産物PR



#### ■ 電車でお越しの方

- JR青梅線小作駅東口より
- 西東京バス 三ツ原循環西回りで10分
- 「平松北」下車徒歩3分
- 駅前タクシー利用 約8分

#### ■ 車でお越しの方

- 圏央道青梅インターより5分
- 青梅街道青梅新町交差点より3分

## 見学される方へのお願い

- ・防疫上、犬や猫などの動物を伴っての見学はできません。
- ・見学にお越しの際は、必ず受付で入门票に氏名等の連絡先を記入してください。  
※鳥インフルエンザ等発生時の連絡に使用します。
- ・指定された見学場所以外は立入らないでください。
- ・場内では禁煙にご協力ください。
- ・当庁舎では食肉や卵、牛乳等の販売は行っていません。  
※家畜伝染病対策等、防疫上の理由により、見学受付を中止することがあります。

## (公財) 東京都農林水産振興財団 青梅庁舎

〒198-0024 東京都青梅市新町6-7-1

青梅畜産センター

TEL:0428-31-2171 FAX:0428-31-8474

農林総合研究センター 畜産技術科

TEL:0428-31-2171 FAX:0428-31-8474

有機農業堆肥センター

TEL:0428-33-3997 FAX:0428-33-3998